

(一) 次のA・Bの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

正岡子規が郷里の松山を發つて、神戸經由の船旅で東京の土をふんだのは、鹿鳴館の落成した明治十六年の六月である。上京後まもなくつくった漢詩で、子規は明治の東京をつぎのようにうたっている。

乾坤掃盡淨無塵 乾坤掃ひ尽くして淨くして塵無く
大政國規渾一新 大政國規 渾べて一新す
共沾天恩僻陬地 共に天恩に沾ふ 僻陬の地
自從帝則太平人 自づから帝則に従ふ 太平の人
風光歷歷八州曉 風光歴々たり 八州の曉
文物燦然四海春 文物燦然たり 四海の春
東府は無學處 東府は無學無き処は無く
1 三遷何用卜交鄰 三遷して 何ぞ交隣を卜するを用ゐん

鹿鳴館時代の東京にたいする、子規のこのナイーヴな讃歌に嘘はない。「文物燦然」たる「四海の春」であつたから、子規は東京大学予備門に入ろうとしたのである。松山時代に自由民権思想の洗礼を受けていたとはいへ、はじめて目にした「帝都」では、「大政國規」は「渾べて一新」しているとみえた。

東京大学予備門がやがて第一高等中学校と改称されてゆく時代は、学校教育のうちにも西洋伝来のものが徐々に吸収されてゆく時代であつた。体育ひとつをとってみても、西洋化は避けることのできない趨勢だったのである。『竹乃里歌』所収の「竿飛を見て」という短歌をみると、

杖あらばいかなるものもこえぬべし我たのむべき杖はこのふみ

とあるが、この「杖」とは棒高跳の「棒」のことで、子規は棒高跳をみながら、「ふみ」(書物)を支えとして高く跳躍しようと思つているのである。「ふみ」とは、いうまでもなく西洋の新知識を盛つた書物である。そして「いかなるものもこえぬべし」という一句のうしろに、和魂のストイックな決断をみることもできるであろう。柳原正之の回想に、

居士が学校から戻つて来ると妙な手つきや腰つきをして頻りに飛びまはるから、それは何のまねだと笑つてやつたら、これは野球をうける態度だと答へた。

とあるように、野球という外来スポーツも青年時代の子規の生活にくいこんでいた。そして、『寒山落木』所収の俳句をつぶさに読んでみると、明治二十年代の子規がいかに開化の世相とともにあつたかに、われわれは驚かずにはいられない。そこには既成のイメージを大きく裏切る、もうひとりの子規がいる。

瓦斯燈にかたよつて吹く柳哉

X 本の間にはさむ桜かな

赤煉瓦雪にならびし日比谷哉

若葉道曲り曲りの電気燈

傾城に電話をかけん秋のくれ

冬枯の木間に青し電気燈

X 人の手を引て行く茂り哉

はつとする博物館や木下閣

菜の花や奥州通ふ汽車の笛

X 犬の耳を垂れたるあつさ哉

最後の四句は、子規の作でも抹消句であるから参考作品というにとどめるが、これらの句にみられる文明開花の世相のイメージは、観念ならぬイメージとして句のうちに生きていて、子規がそれらを好感をもって詠んだことを伝えていると思われる。『筆まかせ』第一編(明治二十二年)のなかで、つぎのように書くとき、子規は外来語による国語改革者として立っている。

近世に至ては洋語の輸入多少ありしが、明治の今日に至りて益甚だし、余は器械道具杯総て日本になき者には訳語

を附せずして原語のままを用ゐるを簡便とす

こうして「テール」、「ガラス」、「フラスコ」など、百をこえる外来品目を挙げているが、この国語改革論を前提とすることなしに、はたして月並俳句を弾劾するあの過激な姿勢が得られたであろうか。むろん子規の藝術上の達成が、鹿鳴館の思想からの脱皮を通じておこなわれたのは当然としても、のちの藝術的、人間的な深さを示した句境を認めたうえで、明治二十年代の子規が脱ぎすていった遺産に、なおも拘泥する自由はのこされるであろう。

ビール苦く葡萄酒渋し薔薇の花

ビールと葡萄酒とはすでに幕末から日本に入っていて、明治初年に博覧会や洋酒店をうたった漢詩のうちにもみるこ
とができる。しかし「苦さ」と「渋さ」とが人間の心境に融合してうたわれたのは、この句が最初ではなかったろうか。
また『於母影』の「花薔薇」においてさえ、バラは野バラであった。右の句の「薔薇の花」が西洋種の栽培用のバラだ
としたら、明治三年ころに移入され、おそらく鹿鳴館にも飾られたであろうバラの花は、明治二十五年にいたって、貴
顕らの特権から解放されて短詩形文学のうちに確たるイメージとして根づいたのである。

うつむくは思案に似たり百合の花

この句は現実のユリの花が思案げにうつむいているのを詠んだのではない。「女画賛」と題する明治二十六年夏の
句である以上、この句の解釈は二通りしかあり得ない、すなわち、女が思案げにうつむいてユリの花を口もとにかざし
ていると解するか、あるいは、女そのもののうつむく姿をユリに擬してうたったか、そのどちらかである。もし前者だ
とすれば、やがて藤島武二の筆に成る雑誌「明星」の表紙画の構図が、この時点で成立しつつあったということである。
もしユリそのものが女だとすれば、『谷間の姫百合』その他の小説題名として入ってきた西欧のシンボリズムが、次第
に日本語の文脈のうちに定着してきたということである。女をユリに擬する語法が日本語のなかになかったわけではな
い。しかし、「立てば芍薬坐れば牡丹、歩く姿は百合の花」という従来語法とは別の、西欧系のシンボリズムである
点が大切なのである。こういう絵画的なシンボリズムの成立展開を、せいけん星丸派ふうのものとして一蹴することも、もちろ
ん可能ではある。だが日本の風土への、そういうものの積みあげがなかったとしたら、はたしてのちの白秋、有明、露
風、李太郎らの詩風が、十分に開花することができたであろうか。

右のような子規の一面を、「明星」派の先駆と呼んだら暴論のそしりを免れないかも知れない。だが、子規の礼賛す
る蕪村をひとつの媒介項として設定するとき、同じ水源から水を汲みあげた者の系譜を想定することはできるのである。
子規の『俳人蕪村』に引用されている句のうち、「複雑的美」と「精細的美」の項に引用されている作品をみると、

梨の花月に書読む女あり

雨後の月誰そや夜ぶりの脛はざ白き

青梅に眉あつめたる美人かな

牡丹散て打ち重りぬ二三片

唐草に牡丹めでたき蒲団かな

子規の共感したこれらの句を、ただちに『みだれ髪』の源流と呼んだら、誇大に失した評言になろう。だが与謝野晶
子が西欧文学とともに、和泉式部と蕪村に水源を求めることがなかったとしたら、『みだれ髪』は成立の余地さえな
かったのである。

夜の帳ちやうにささめき尽きし星の今を下界の人の鬢びんのほつれよ

久しく難解とされ、諸説のある『みだれ髪』巻頭の一首の重層性を解きほぐすことは、「明星」派の水脈の性質を解
くことである。まず冒頭の「夜の帳」とはなんだろうか。

「帳」を伝統的な語法と受け取るならば、「夜の几帳」と考えるのが正しく、通説はその見解をとっている。平出修
『新派和歌評論』（明治三十四年刊）は「夜の帳」を「夜の室といふが如きもの」と考えているが、私が興味を触発され
るのは角川文庫版『みだれ髪』が、「夜の帳に」を「夜のとばりの陰に」と注していることである。この解釈が晶子の
歌に適切であるかどうかは別問題としても、「夜のとばり」という語法をわれわれが所有している限り、晶子のいう
「夜の帳」がわれわれのいう「夜のとばり」とどう異なるかは、なお問題たりうることなのである。

「夜のとばり」という語法は、『国歌大観』と『国歌大系』で検索してみると、日本の古典短歌では一度も用いられて
いない。また『雅言集覧』の「とばり」の項目には、「雲のとばり」「霧のとばり」「紅葉のとばり」「錦のとばり」はあ

っても、「夜のとばり」だけは出ていない。それが日本語の伝統のうちには存在しなかったとすれば、西洋文学の影響の結果と考えるしかない。明治十一年に出た讚美歌の一つ（笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』に引用）に、

よるの幕ひくの わがまもりぬしぞ

とあるのも西欧からの移入の一例で、英文学に実例を求めると、『ロミオとジュリエット』三幕二場につきのような用例がある。

Spread thy close curtain, love-performing night,...

恋を営むための夜よ、おまえの厚いとばりをめぐらしてくれ、

すなわち「夜」の擬人化を通じて「夜」そのものが「とばり」の役をする語法として、英詩にみいだされるのである。いまでは歌謡曲に出てきても不自然でないほど一般化したこの語法も、鹿鳴館文化が古来の「とばり」の語法に新たな美しさを加えたものであり、それによって日本語はいっそう豊かになったのである。「明星」創刊号から連載されている戸沢姑射「英詩評釈」では、「curtain」は「帷帳」および「帳」の両様に訳されている。したがって『みだれ髪』の「夜の帳」は、いまわれわれの考える「夜のとばり」ではなくても、伝統的な「几帳」の意味を踏襲しながら多分に西洋化していたのである。

「鬢のほつれ」という用語も、当時の「言葉の海」のなかに生きていたものの一つである。それは都々逸にうたわれているだけでなく、「明星」誌上にあっても、第三号所載の前田林外『二種の家族』のなかに、

鬢のほつれに白髪ある

主翁は田より帰りきて

という一節があるように、男女を問わず髪に用いられるごく一般的な言葉であった。晶子はそれを詩的な象徴にまで高め、日本語に新しい富をつけ加えたのである。そういう言葉の再生に作用したのが日本文学の伝統であり、子規を深く動かした蕪村の、

枕する春の流れやみだれ髪

である。そして、さらに遠いところには、晶子の愛読した王朝文学のうちでも、とくに和泉式部の、

くろかみの乱れも知らず打ち臥せばまづかきやりし人ぞ恋しき

があったであろう。このへんの問題については、芳賀徹氏の『みだれ髪の系譜』が秀れた考察を試みているので、ここでは芳賀氏の挙げていない最古の用例を『万葉集』巻十一から引用するにとどめる。

ぬばたまのわが黒髪を引きぬらし乱れてさらに恋ひわたるかも

3 晶子がロゼッティに動かされて、なお歌の急所をあやまたず、かつ短歌の革新をなしたげたのは、どう革新しても失われることのないだけの、日本の文学伝統が信じられていたからである。私がここにいる伝統とは、T・S・エリオットがホメーロス以来の西欧文学の累積を伝統と呼んだ意味での伝統であり、伝統主義という名のイデオロギーとは無縁のものである。

（磯田光一『鹿鳴館の系譜』による）

B

宗匠的俳句と言へば、直ちに俗気を連想するが如く、和歌といへば、直ちに a を連想致し候が年来の習慣にて、はては和歌といふ字は a といふ意味の字の如く思はれ申し候。かく感ずる者和歌社会にはこれ無しと存じ候へど、歌人ならぬ人は大方か様の感を抱き候やに承り候。をりをりは和歌を誦する人に向ひて、さて和歌は如何様に改良すべきかと尋ね候へば、その人が首をふつて、いやとよ和歌は腐敗し尽したるに、いかでか改良の手だてあるべき、置きね置きねなど言ひはなし候様は、あたかも名医が匙を投げたる死際の病人に対するが如き感を持ちをり候者と相見え申し候。実にも歌は色青ざめ呼吸絶えんとする病人の如くにもこれ有り候よ。さりながら愚考はいたく異なり、和歌の精神こそ衰へたれ、形骸はなほ保つべし、今にして精神を入れ替へなば、再び b なる和歌となりて文

壇に馳駆するを得べき事を保証致し候。こはいはでもの事なるを、或る人がはやこと切れたる病人と一般に見なし候は、如何にも和歌の腐敗の甚しきに呆れて、一見して放棄したる者にや候べき。和歌の腐敗の甚しさもこれにて大方知れ申すべく候。

この腐敗と申すは趣向の変化 Y が原因にて、また趣向の変化 Y は用語の少きが原因と存ぜられ候。故に趣向の変化を望まば、是非とも用語の区域を広く Y べからず、用語多くなれば従つて趣向も変化致すべく候。ある人が生を目して、和歌の区域を狭くする者と申し候は誤解にて、少しにても広くするが生の目的に御座候。とはいへ如何に区域を広くするとも非文学的思想は容れ申さず、非文学的思想とは理屈の事にこれ有り候。

外国の語も用るよ、外国に行はるる文学思想も取れよと申す事につきて、日本文学を破壊する者と思惟する人もこれ有りげに候へども、それは既に根本において誤りをり候。たとひ漢語の詩を作るとも、洋語の詩を作るとも、將たサンスクリットの詩を作るとも、日本人が作りたる上は日本の文学に相違これ無く候。唐制に模して位階も定め、服色も定め、年号も定め置き、唐ぶりたる冠衣を著け候とも、日本人が組織したる政府は日本政府と申すべく候。英国の軍艦を買ひ、独国の大砲を買ひ、それで戦に勝ちたりとも、運用したる人にして日本人ならば日本の勝と申すべく候。しかし外国の物を用ゐるは、如何にも残念なれば日本固有の物を用ゐんと考ならば、その志には賛成致し候へども、とても日本の物ばかりでは物の用に立つまじく候。文学にても馬、梅、蝶、菊、文等の語をはじめ、一切の漢語を除き候はば、如何なる者が出来候べき。『源氏物語』、『枕草子』以下漢語を用ゐたる物を排斥致し候はば、日本文学はいくばくか残り候べき。それでも瘦我慢に、歌ばかりは日本固有の語にて作らんと決心したる人あらば、そは御勝手次第ながら、それを以て他人を律するは無用の事に候。日本人が皆日本固有の語を用ゐるに至らば日本は成り立つまじく、日本文学者が皆日本固有の語を用ゐたらば、日本文学は破滅致すべく候。

★あるいは c にも馬、梅、蝶、菊、文等の語はいと古き代より用ゐ来りたれば、日本語と見なすべしなどいふ人もこれ有るべく候へど、いと古き代の人は、その頃新しく輸入したる語を用ゐたる者にて、この c 論者 c 論者が当時に生れをらば、それをも排斥致し候ひけん。いと笑ふべき撞着に御座候。仮に c 論者に一步を借して、古き世に使ひし語をのみ用ゐるとして、もし王朝時代に用ゐし漢語だけにても十分にこれを用ゐなば、なほ和歌の変化すべき余地は多少これ有るべく候。されど歌の詞と物語の詞とは自ら別なり、物語などにある詞にて歌には用ゐられぬが多きなど例の歌よみは申すべく候。何たる笑ふべき事には候ぞや。如何なる詞にても美の意を運ぶに足るべき者は皆歌の詞と申すべく、これを外にして歌の詞といふ者はこれ無く候。漢語にても洋語にても、文学的に用ゐられなば皆歌の詞と申すべく候。

(正岡子規『歌よみに与ふる書』による)

問一 傍線部1「三遷何用ト交鄰」とあるが、この句の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 一生涯に三度も左遷されたけれども、家族や近隣の支援によって気持ちが減入ることは一度もない。
- ロ 東京に上京後、三度まで転居して、どこに住んでもその快闊な人柄が近隣の人からは歓迎されるといふ占いが出た。
- ハ 東京では処々に学校を中心とする市街地があるので、三度も転居するほど居住環境に神経を使う必要はない。
- ニ 三度目の転居先である本郷界隈は、東京大学が近いが、そこでの暮らしと近所付き合いに馴染むために易を立ってもらった。
- ホ 漢詩、短歌、俳句と主たる表現媒体を三度も変更したが、どのジャンルで創作する場合も、周囲には何の心配もかけない。

問二 傍線部2「もしユリそのものが……定着してきたということである」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 絵画的シンボリズムとして女性をユリに見立てることは、『谷間の姫百合』といった小説の題名などから日本に入ってきた西洋の見方であるが、それが正岡子規の俳句に認められるのであれば、日本語の表現の中に西洋風の捉え方が定着してきたということになる。

ロ 女性をユリの姿を表すシンボルとして利用するのも、女性がユリの花をかざすことをモチーフとするのも、絵画的なイメージとしてさらにユリを新しく位置づけるということであり、正岡子規の俳句がこれを定着させれば、日本文学の伝統を変えることとなる。

ハ 女性をユリの姿として表現するのは、シンボリズムという西欧のイデオロギーによるものである。それが日本の文化に入ってきたことによって、正岡子規の俳句は西欧の文脈を日本文学の文脈の中に応用することに成功したと言える。

ニ 「明星」の表紙画のように女性をユリの姿のイメージでシンボル化するという俳句を作ることは、シンボリズムという西欧の文化が近代日本においてすっかり定着したからできたことである。正岡子規がその点に成功しているのであれば文学の文脈が変化したことを示すものと言える。

ホ 女性をユリの姿として擬人化することは日本文化の中にも本来あったことだが、西洋のシンボリズムでもあった。正岡子規がそうした手法の共通性に着目したことは、西欧のシンボリズムを真に理解したことだと言える。

問三 傍線部3「晶子がロセッティに動かされて……信じられていたからである」とあるが、この意味するところとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 与謝野晶子は既存の語を西洋化した意味で用いたり、詩的な象徴にまで高めたりすることで日本語をより豊かにしたが、そのようなことが可能となった背景には日本の古典文学に対する深い知識があった。

ロ 与謝野晶子の短歌が革新的であったのは、和歌の伝統を尊重すべきであるという信念を貫きつつ、『万葉集』や和泉式部、与謝蕪村の用いた「みだれ髪」の系譜をふまえて詩作に臨んだからである。

ハ 与謝野晶子の用いた「夜の帳」という語は日本語の伝統のうちには存在せず、西洋文学の影響によって作り出されたものであるが、長らくこの語は日本の文学伝統として存在したと信じられていた。

ニ 与謝野晶子がイギリスの詩人ロセッティに勧められて短歌の革新をおこなった背景には、長い伝統を持つ日本文学がイギリス文学に勝るとも劣らない価値を持っているという晶子の確信があった。

ホ 与謝野晶子が短歌の西洋化という革新をなしたとげたのは、日本の文学伝統があまりに強固であり、それを乗り越えない限りは短歌の未来はないという自覚を古典文学の愛読を通して持っていたからである。

問四 空欄 に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ a 陳腐 b 健全 c 姑息

ロ a 姑息 b 健全 c 陳腐

ハ a 健全 b 陳腐 c 姑息

ニ a 陳腐 b 姑息 c 健全

ホ a 姑息 b 陳腐 c 健全

問五 傍線部4「精神を入れ替へるについて、筆者は具体的にどのようなことをするべきだと主張しているのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 和歌は腐敗し尽くして改良の手立てがないと批判することをやめ、今後の可能性を信じて改革を行うべきである。

ロ 和歌の中に何を詠み込むかにこだわることをやめ、形式を重要視することによってその命脈を保つべきである。

ハ 和歌の旧態依然たる趣向を捨て去り、漢詩や西洋の詩、サンスクリットの詩などの趣向を積極的に摂取すべきである。

ニ 和歌がこれまで採用していた非文学的思想を排除し、文学的思想を育んで理屈に縛られない歌を詠むべきである。
ホ 伝統的和歌のあり方に固執するのではなく、外国の語をも歌に詠み込んで外国の文学思想も取り入れるべきである。

問六 Aの文章の空欄 X に共通して入る漢字一字を、Bの文章の★以降から抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問七 Bの文章の空欄 Y に共通して入るひらがな三文字を、前後の文脈をよく考えて、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問八 AまたはBの文章における言葉に対する正岡子規の姿勢を述べた文として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ Aの文章では、正岡子規が外来語による国語改良を目指す中で、日本語のうち外来語に置き換えられるものは積極的に外来語を使うよう主張したことが述べられている。

ロ Aの文章では、正岡子規が俳句に詠んだ外来語の中にも、「ビール」などすでに幕末から日本に入っていて、表現の方法が確立していたものがあることを指摘している。

ハ Aの文章では、正岡子規が外来語に好感を持って句作に採用したことが述べられているが、Bの文章では、外来語が日本の言葉や日本文学を破壊させると述べられている。

ニ Aの文章では、正岡子規が外来語による国語改革論を主張したと述べられているが、Bの文章では、短歌において外来語と同様に漢語も採用すべきだと主張している。

ホ Bの文章では、日本語の中から漢語を排除すると、『源氏物語』や『枕草子』のような古典文学はかろうじて残るが、近代の文学は成り立たないことが述べられている。

問九 AおよびBの文章の大意について述べたものとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ Aの文章は正岡子規の文学における漢文の重要性を述べつつ、その漢文の素養が西洋文化への関心と共に俳句にまで広がっていることを述べている。この点は、正岡子規によるBの文章でも同様で、旧来の和歌を厳しく非難すると共に、日本文化における漢語の重要性を主張している。

ロ Aの文章は、正岡子規における西洋文化の摂取の様相を様々な作品によって明らかにし、与謝野晶子との共通点などにも言及している。この点、正岡子規によるBの文章は必ずしも西洋文化に焦点を当てているわけではないが、漢語や洋語の取り入れについて肯定的といえる。

ハ Aの文章は正岡子規の漢詩によるナイーヴな東京への賛歌から始まり、野球への傾倒など、彼自身における西洋文化の摂取の深まりを様々な俳句を元に立証している。Bの文章は、その観点と軌を一にし、正岡子規自身が西洋文化の優位性を指摘し和歌文学の伝統を厳しく批判している。

ニ Aの文章では西洋文化の輸入が明治文学を刷新したことを主に正岡子規における俳句など様々な作品をもとに例証し、西洋文化の輸入にも与謝野晶子など多様な形態があったことを指摘している。正岡子規によるBの文章はそれとは違い、和歌文学における漢文復古を強く主張している。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A 食権力とは、食料の集中によって、人や社会や国を威嚇したり、その行動をコントロールしたりすることを意味する。筆者の造語である。たとえば、カーギルやアーチャー・ダニエルズ・ミッドランドのような多国籍で一族経営の巨大食料商社は、世界の食料とそれを蓄えるカントリーエレベーターと運搬する船を所有し、各国の為替の違いや商取引慣習の差異、あるいは、気象条件や政治状況の情報をいち早くつかむことで穀物売買によって利鞘^{りざや}を得る。それによって世界の穀物価格が変動し、農民たちもその価格に左右される。土を耕さなくても、雑草や害虫を駆除^{りぞく}しなくても、恒常的に利益を得る。ミシシッピ川河口やウクライナのオデッサ、ロッテルダムやイスタンブールのコウワンなどに巨大な穀物倉庫を所有し、その巨大な「量」によって振るうことができる権力である。〔イ〕

私たちはあまり気づいていないが、毎日食権力に脅かされている。輸出国のアメリカ、カナダ、ブラジル、オーストラリアなどから「食料は売らない」と言われれば、ちよつと高くても別のルートを頼って購入しなければならぬ。実際に、一九七〇年にチリで社会主義的なアジェンデ政権が誕生したとき、アメリカは補助金付きの穀物輸出をストップし、アメリカの圧力のもとミルクの独占的企業であるネスレはミルクの輸出もストップした。これは、飢餓という恐怖を与える、とりわけ子どもたちへの威嚇であった。必然的に食費は上昇し、人々の生活は苦しくなるが、その矛先は飢餓に弱い子どもに向かう。

I

ところで、私が食権力的な状況を「食暴力」と名づけなかったのは、発揮される力がかならずしもネガティヴとは限らないからだ。小規模であっても一か所に食を集中させることで、巨大な食権力の暴威から身を守ることができる。食料を保管し、共有して、価格変動や自然災害に備えることができるのである。

最近の巨大穀物商社は、もう穀物だけを扱うのではなく、果物や野菜、加工品や調味料、バイオディーゼルなど多角的な展開をしている。末端の消費者まで食権力は届いており、そのなかで、自分たちの食生活を営まざるをえない。どこでも売っているスナック菓子やペットフードやカップラーメン、アイスクリームや冷凍食品など、安価なものほとんどが、これらの商社の管理下にある。〔ロ〕

自炊について考えるとは、こうした食権力のただなかで、いかに食べ生きるかを考えることである。

「自炊」という言葉は誤解を与える。自分ひとりで自分の家で炊事する、という意味だと思われがちであるが、そうとはかぎらない。第一に、「自分」とは「自分たち」かもしれない。単数でなければならない理由はない。共同で炊事をすることも想定されなければならない。第二に、「炊」には、食品の購入、保管、料理、盛り付け、片付け、生ごみの処理まで含まれる。料理だけでは炊事とはいえない。第三に、己一身の力で炊事することは不可能である。近くに八百屋やスーパーがなければならぬし、その店員がいなければならぬ。農家も漁家もいなければ、自炊は不可能である。冷凍食品や既製品の調味料や魚の切り身を用いる自炊は、冷凍食品企業やスーパーや調味料メーカーの労働者たちの「他炊」によって成り立っている。「自炊」とは実は、「他炊」、つまり、他者(たち)の力を借りて自分(たち)の料理が成り立っている、という事実とさえいえる。〔ハ〕

忘れてはならないのは、発酵食品は、微生物たちの力を借りる「他炊」だということである。人間の力だけでは、味噌や醤油や日本酒はできない。「他炊」とは、知らずしらずのあいだに社会に根づいた食の人間中心主義を突破する概念である。

となると、巨大な財力を持つ食権力が提供する魅惑の「他炊」商品の嵐にあらがい、自分たちが自分たちらしく自分たちの手で料理をするためには、単に自分の料理の腕を磨くだけではなく、相性のいい小さな「他炊」をたくさん見つけ、組み合わせ、料理をめぐるネットワークを充実させることが必要不可欠である。富裕層は毎日外食でも破産しない珍しい階級である。だが、非富裕層は、自分たちで料理のネットワークを作らなければ破産する。富裕層は工夫を忘れる。しかし、非富裕層は工夫を忘れることができない。なぜなら工夫こそが、生命を支えるからだ。これが、非富裕層の弱みとみるか、強みとみるかは、その人の考え次第だろう。

料理という行為は、それゆえ、孤立した個人としてではなく、
II
というかたちをとらざるをえないのである。

複数の「他」を思い思いに組み合わせ、自分たちで仕上げていく炊事の祭典。それがどれほど魅力的であっても、大きな食権力を借りることなく、自分たちの力で炊事の道を切り開いていくことは、とてつもなく難しい。巨大な商社²の力を借りないで、それが握る巨大な船舶のネットワークから逃れ、自分が信頼できる人たちから食物を買って運び、自分たちの調味料で味付けをし、食べることは簡単なことではない。「他炊」の世界が巨大な商社によってほとんど握られているいま、どのようにして、にぎやかで豊かな「他炊」の重なり、もしくは「自分たちの炊事」をもたらすことが可能だろうか。三段階に分けて、その道筋を説明したい。〔三〕

第一に、食物を、とりわけ穀物を先物取引や投機の対象から外すことである。投機の対象になつていない食物を選び、投機フリー食品を世界中に溢れさせること。とりわけ、その対象である小麦と大豆、ユシ²の入手ルートを確保すること。食権力の保持者による投機合戦によって、食物価格が高騰し、世界中で飢えが発生する。そこから逃れた作物は、必然

的に、多くの「他」を呼び込む。

第二に、自炊の場所の共有スペースを増やすことである。個人の炊事で投機フリーの食材で料理をしても、それはあまりにも労力と時間がかかる。「自分たち」の炊事の場所を増やすことで、自炊を磨きあう。「ホ」人に頼らなければ自炊ができない。それだけ食事とは時間がかかる。しかし、それこそが、「生きる」ことではなかっただろうか。働き手に、自炊時間も睡眠時間も切り詰めさせようとする企業文化は、人生論的にそろそろ限界が来ているのではないか。

そして第三に、自分の作ったものを他人に食べてもらう機会を、教育の現場でもっと増やすことである。他人に食べてもらうことは、ケアのもっとも根源的な部分であり、他人を真に信じることの始まりである。ところが、戦後、日本では家庭科の調理実習は減り続けてきた。受験勉強の幼年化のなかで、どんどんと調理は子どもたちの現場から離れている。料理は母親から学ぶものだ、という時代ではもうない。もっと多様なルートを通じて、「他炊」の経験を積んでいく場所を確保するには、教育現場ほど、それが相応しい場所はない。給食が教育の一環である、という日本の不思議な伝統をこのさい活かして、調理員から生徒が料理を学ぶ機会がもっとあってもいいだろう。

私たちは、特定の他者に炊事をしてもらい、特定の他者のために炊事をすることで、信頼という現象を肉体を通じて学んでいる。毒を盛られたら終わりの世界で、肉体の底から湧き起こる信頼感を日々体得している。それを「自炊」という粗い概念でとらえてきたことは、もったいないことだったかもしれない。大きな船と大きな財力で築かれた食事も便利だけれど、小さな道と小さな歩幅と微細な生物で築かれた食事は、それだけ他者を巻き込み、ケアを発動させる。だから、他炊は、信頼とケアが衰微する時代の抵抗なのだとと言えるかもしれない。

（藤原辰史「他炊論」による）

問十 傍線部A「食権力とは、食料の集中によって、人や社会や国を威嚇したり、その行動をコントロールしたりすることを意味する」とあるが、「食権力」について本文の内容と合致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 強大な食権力を持つ食料商社は、利益を得るために商品を売らないという圧力をかけることで、人びとに飢餓の恐怖を与え、食品の価格をつりあげている。
- ロ 消費者に提供される便利な食品の多くは、巨大な食権力を持つ食料商社などが生産や流通に広く関与しており、その権力はあらゆる購買層に浸透している。
- ハ 食権力は必ずしも負の側面を持つわけではなく、一定の量の食料を保管して共有することによって、国境を越えた経済危機や自然災害への支援も可能になる。
- ニ 食料商社などが大量の食料を確保して食権力を持つ現状に対し、生産者はそれを左右できる存在であるため、連帯すれば食権力から完全に逃れる可能性がある。

問十一 空欄 I の段落は次の①～④の文から構成されるが、その並べる順序として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ① 逆にいえば、熱量を穀物倉庫に蓄えている国は、必然的に飢えにくい国だと言える。
- ② これが問題なのは、人間は食べることで熱量を保持できなければ簡単に死に至るからである。
- ③ 日本は、販売金額の自給自足率はそれほど低くないが、カロリーの自給自足率が低い。
- ④ ホウレンソウや小松菜や大根など日本の金額ベースの食料自給率を上げている品物だけでは炭水化物が不足、体を動かすことが困難になる。

- イ ④ ↓ ② ↓ ① ↓ ③
- ロ ② ↓ ③ ↓ ① ↓ ④
- ハ ③ ↓ ② ↓ ④ ↓ ①
- ニ ④ ↓ ① ↓ ③ ↓ ②

問十二 次の文は本文中に入るべきものである。本文中の「イ」～「ホ」から最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

もつとつきつめていえば、純粹無垢な自炊などどこにも存在しないのである。

問十三 傍線部B「食の人間中心主義」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 食料の生産、加工、保管、共有がすべて人間の手によって行われ、人間社会の間で循環していると考えること。
- ロ 「食」とは、人間生活の根幹であるが、同時に大自然の食物連鎖の中に人類の優位性を位置づけて考えること。
- ハ 「食」とは、個々人の行動ではなく、人と人が強大な食権力に対抗するネットワークを築く力だと考えること。
- ニ 料理をすることや食べることも、人間が人間らしくあるためにあらゆる生物への共感が必要だと考えること。

問十四 空欄 Ⅱ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 家族単位での工夫と節約による小規模なレジスタンス
- ロ 地球環境全体にも目配せをしたほどよく緊密な団結
- ハ 小さな集団としての巨大な食権力へのささやかな抵抗
- ニ 非富裕層による大規模なネットワークの構築

問十五 傍線部C「他炊は、信頼とケアが衰微する時代の抵抗なのだ」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 親が愛情をこめて作った料理を食べ続けることを通じて、子どもは親に全幅の信頼を寄せる体験を蓄積し、他者に対する信頼感の土台を培っており、相互不信に陥りがちな現代社会において、各家庭で親が料理を作って子どもに食べさせることは、他者への信頼感を社会に取り戻すために必要不可欠である。
- ロ 現代の食事はインスタント食品などで、手軽に一人で済ませることも多いが、料理は本来一人で作って食べる孤独な営みではなく、他者とともに作った料理を一緒に味わい楽しむものであり、食を通じて大勢の人びとにぎやかに繋がる楽しさを取り戻すことによって、現代の希薄な人間関係に変化をもたらし得る。
- ハ 料理には毒を盛られる危険性があり、他者が作った料理は作り手への信頼なしに食べられないということは忘れがちだが、誰がどういう過程を経て作ったものが見えず、食の安全性に不安がつきまとう現代において、作り手という具体的な存在を可視化することは食への信頼を取り戻す第一歩になる。
- ニ 料理は食材の調達や調理などの過程に多くの人手と手間がかかり、他者からの手助けなしには成立しないため、複数の人びとが支えあって作られ享受される料理を、一人一人が意識し実践を積み重ねることは、互いに関心を寄せあつて繋がることが見失われがちな現代の人間関係を問い直す契機になる。

問十六 傍線部1・2のカタカナの部分の漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ(楷書で丁寧に書くこと)。

(三) 次の甲・乙・丙の文章を読んで、あとの問いに答えよ。問題文中の古文・漢文は、原文を読みやすく改めたり、返り点・送り仮名・読点などを省いたりした箇所がある。

甲「次の文章は、興膳宏『中国名文選』(二〇〇八年)の一節である。」

日本人は中国の古典を読解するために、早くから訓読の方法を取り入れた。訓読とは、日本語とは言語的性質を異にする中国語で書かれた詩文を、日本語の語序に合わせて直訳する読み方である。

たとえば、中国語の文法構造は、主語＋述語＋目的語の形を取るが、日本語では主語＋目的語＋述語となる。だから、たとえば『論語』雍也篇の「知者楽水、仁者乐山」を、「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」のように、日本語の語序に変換して読む。原文の構造はそのままにして、記号でそのことを示すためには、二つの「楽」字の左下に、「楽水」「乐山」と、小さく「レ」点を加える。いわゆる返り点である。目的語が二字以上であれば、「レ」の代わりに漢数字の「二」を述語動詞の左下に、「一」を目的語の左下に加える。たとえば、「聽其言而信其行」(其の言を聴きて其の行を信ず)(『論語』公冶長篇)のように。もっと複雑な構文の場合は、その他に、「上中下」や「甲乙丙丁」の記号を用いることもある。

こうした訓読法の規則は、高等学校で漢文を学習した人なら、最初に必ず教わったはずである。訓読法は、我々の祖先が中国の古典を読むために工夫した技術で、長い時間を経てさまざまな改良を加えられながら今日に至っている。訓読法の起源については、王仁が漢籍をもたらした時から始まったという説や、初めは音読していたのが、奈良時代になって訓読するようになったという説がすでに江戸時代からあるが、ほんとうのところはよく分からない。ただ、奈良時代の大学には「音博士」があつて、経書の音読を教えていたのは事実である。

訓読法はこのように古くから始まったものだが、時代によって変遷があり、決して現在の漢文教科書のような読み方がずっと伝えられてきたわけではない。つまり、訓読はあくまで漢籍を理解するために工夫された手段であり、漢語の文章を日本語としてより身近に理解するために、時代によっていろいろな方法が試みられたのである。いずれにしても、訓読の文体は最初から人工的に作り上げられたものだった。現行のような漢文訓読法は、江戸後期に始まって明治時代に定着したといつてよい。

訓読のことは人工的なものだが、その工夫のしどころとして、原文の漢語と和語をいかに調和させるかという問題がある。そのために、「訓点語彙」と称される独特の表現が案出された。たとえば、「将」を「まさにせん」と読み、「不敢」を「あへてせず」と読むなどがそれである。これらは、和語の文脈にはなっていないが、一般の人が日常の会話の中で使うこととは性格を異にする特殊な語法だった。しかし、こうした訓読調の文体が、やがて通常の和文脈の中にも入りこんでくるようになる。

『今昔物語集』巻九には、中国の『孝子伝』(漢から六朝にかけて成立)などにもとづく親孝行の話が並ぶが、その一つに、郭巨が貧しい生活の中で母を養うために、せつかく生まれた男児を地に埋めて犠牲にしようとする話がある。郭巨が妻とともに、泣く泣く土を掘っていると、黄金の釜を掘り当てた。そこまでの叙述は、『孝子伝』の故事を和文脈に移しながら記されるのだが、釜の上に刻まれた文字を記すには、『孝子伝』の文章をそのまま訓読している。「黄金ノ一ノ釜、天、孝子郭巨ニ賜フ」。ちなみに、『孝子伝』のその箇所は、「黄金一釜、天賜孝子郭巨」(船橋本)である。『今昔物語集』では、このように和文脈を基調としつつ、ところどころに訓読調を挿入している箇所が、このほかにもよく見られる。

それからやや時代が下って、『方丈記』の有名な書き出しは、もつと強く訓読調を感じさせる。

ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、シカモモトノ水ニアラズ。澱ニ浮カブウタカタハ、カツ消エカツ結ビテ、ヒサシク留マリタルタメシナシ。(『新日本古典文学大系』による)

この一節を漢訳するとすれば、さしずめ「逝川不絶、I非故水。淀上泡沫、且消且生、無時停留」とでも訳せようか。なぜこの文が訓読調を感じさせるかといえば、まず全体が「ユク河ノナガレハ：」「澱ニ浮カブウタカタハ：」と、大きな対句構造(対偶表現)になっていることである。文言では、至るところに対句ないしは対偶表現が頻用される。対偶表現こそは、現代語も含めて、中国の文章の最大の特徴であり、中国人の思考方式そのものでさえある。それに、「ユク河ノナガレハ：」の文は、背景に『論語』子罕篇のいわゆる「川上の嘆」、「逝く者は斯くの如きか、昼夜を舍てず」の存在を揺曳させる。さらにまた、「カツ：カツ：」という、「且：且：」の構文をそのまま移したような句が用いられていることも、訓読調をいっそう濃くしている。「且」を四字句中で重ねた例としては、劉琨「勸進表」(『文選』卷三十七)の「且悲且惋(且つ悲しみ且つ惋む)などが挙げられる。

『方丈記』よりやや後の『徒然草』にも、往々にして訓読調の句づくりが見出される。いま、第七十四段の前半を引いてみよう。

蟻のごとくに集まりて、東西に急ぎ、南北に走る人、高きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、帰る家あり。夕に寝ねては朝に起く。営む所、何事ぞ。生をむさぼり、利を求めて、やむ時なし。

〔『新日本古典文学大系』による〕

息の短い文脈で、「東西」「南北」「高き」「賤しき」「老いたる」「若き」など対偶表現を積み上げる句法は、まさに訓読の調子を思わせる。「営む所……」以下の句は、「所営何事。貪生求利、無已時矣」と、ほぼそのまま文言に置きかえることができようか。

鎌倉時代以降の文章では、このように和文脈の中にも、漢文訓読調の発想が潜んでいて、それが時として伏流水のように、表面に出てくるのが珍しくない。それだけ漢文脈が日本語の書きことばの中に深く内在していったともいえる。江戸から明治にかけて、中国の古典、いわゆる漢文が武士を主とする知識階層の共通の教養となつてからは、こうした傾向はいっそう強まってくる。明治の文明開化以後、新しい文体を求めてさまざまな試みがあつたが、そこには常に漢文訓読調との葛藤があつた。

坪内逍遙といえは、代表作『当世書生氣質』（二八八六年）をはじめとして、口語による文体創出のために苦心した明治前期の作家として著名だが、彼の数ある著作の中でも、評論はまた別種の趣を示している。

3 春水（為永春水）の著述、一種にして足らず。情史あり、稗史あり、所謂洒落本をかきたる事あり。臬冊子合巻の類も綴りぬ。されども春水が其名を得たるは専ら人情の冊子にあり。他の臬冊子、稗史の如きは所謂片手間の内職にして、得意の著作なりといふべからず。〔稗史家略伝并に批評〕

この文体は、『当世書生氣質』の、「さまざまに、移れば換る浮世かな。幕府さかえし時勢には、武士のみ時に大江戸の、都もいつか東京と、名もあらたまの年毎に、開けゆく世の余沢なれや」（第一回）といった調文体のリズムとは、おのずから異質のものである。理を旨とする文章を著わすに際しては、やはり襟を正した訓読調の文体こそが有効と意識されたのである。このことは、先の『方丈記』や『徒然草』にも通ずるところがある。総じて、近世から近代にかけての漢文そして漢文訓読調文体の役どころが、こうした理詰めの文章だったといえようか。

明治になって、公文書は候文から漢文訓読調に変わり、日常生活にも漢語が大量に流入してくる。こうした現象について、石井研堂は、「思ふに、これ維新の風雲に際会してはかに台頭せる官吏は、多く月落ち烏啼いて的書生畑より出でし人々であり、その人々の使用語が、優越語標準と認められ、それを真似るのが天下一般の維新色を発揮せしにあらざるか」（『明治事物起源』人事部）というが、もつともな見解であろう。当時流行の訓読調の文章、いわゆる「普通文」が、現在のような言文一致に脱皮するには、さらなる葛藤を必要とした。

乙「次の文章は、甲に言及される『孝子伝』郭巨である。」

郭巨者、河内人也。父無母存。供養^{スルコト} 勤^{キン} 々^{タタリ}。於^{イテ} 年^ニ 不^{シテ} 登^ラ 而人庶飢困。爰^ニ 婦生^ム 一男。巨云、若^{ハバ} 養^レ 之^ヲ、恐^{ラクハ} 有^ニ 老^ラ 養^レ 之^ヲ。妨^ゲ 母抱^ニ 兒、共^ニ 行^キ 山中、掘^{リテ} 地^ヲ 将^ニ 埋^メ 兒。底^ニ 金^一 釜^{アリ}、釜上^ニ 題^{シテ} 云、黄金一釜、天賜^ニ 孝子郭巨。於^ニ 是^ニ 因^{リテ} 兒^ニ 獲^ニ 金、不^レ 埋^ニ 其^ノ 兒。忽然^{トシテ} 得^ニ 富貴^ヲ、養^{フコト} 母^ヲ 又不^レ 乏^{シカラ}。天下^ニ 聞^キ 之^ヲ、俱^ニ 誉^{ムル} 孝道^ニ 之^ヲ 至^{レルヲ} 也。

丙「次の文章は、乙の類話にあたる、お伽草子『二十四孝』郭巨である。」

貧^{ヒン} 乏^{ボク} 思^シ 供^ク 給^キ
埋^{ウツ} 兒^ニ 願^{ハク} 母^ヲ 存^ス
黄^{ワウ} 金^{キン} 天^{テン} 所^ス 賜^メ
光^{クワウ} 彩^{サイ} 照^シ 寒^{カン} 門^{メン}

郭巨は、河内といふ所の人なり。家貧しうして、母を養⁴へり。妻一人の子を生みて、三歳^①になれり。郭巨が老母、かの孫をいづくし、わが食事を分け与へけり^②。ある時、郭巨、妻に語るやうは、「貧しければ、母の食事さへ、心に不足と思ひしに、その内を分けて、孫に給はれば、乏しかるべし。これ、ひとへにわが子のありし故なり^③。所詮、なんぢ

と夫婦たらば、子二度あるべし、母は二度あるべからず。とかく、この子を埋みて、母をよく養ひたく思ふなり」と、夫婦言ひければ、妻も、さすが悲しく思へども、夫の命に違はず、かの三歳の児を引き連れて、埋みに行き侍る。すなはち、郭巨、涙を押へて、少し掘りたれば、黄金の釜を掘り出せり。その釜に、不思議の文字すわれり。その文には、天賜孝子郭巨、不得奪、民不得取と云々。この心は、天道より郭巨に給はるるほどに、余人取るべからずとなり。すなはち、その釜を得て喜び、児をも埋まず、ともに帰り、母にいよいよ孝行を尽くせるとなり。

問十七 甲の文章の空欄 I に入る漢字として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 以 口 為 ハ 加 ニ 而 ホ 即 ヘ 与

問十八 甲の文章の傍線部 1 「逝く者は斯くの如きか、昼夜を捨てず」と左の漢文を訓読する場合、必要な返り点を記述解答用紙の所定の欄に記せ。ただし、記入するのは返り点のみで、送り仮名や句読点は書き加えてはならない。

逝者 如 斯 夫 不 舍 昼 夜

問十九 甲の文章の傍線部 2 「揺曳させる」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 決定づける
口 覆いかくす
ハ 増幅させる
ニ とおざける
ホ ひきつける
ヘ ひびかせる

問二十 左の文章は、甲に言及される『徒然草』第七十四段の後半部分である。その内容と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

身を養ひて何事かを待つ。期する処、ただ老と死とにあり。その来る事速かにして、念々の間にとどまらず。是を待つ間、何の樂しびかあらん。まどへる者はこれを恐れず。名利におぼれて先途の近き事を顧みねばなり。愚かなる人は、またこれを悲しぶ。常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。

イ 愚かな人間が老いや死を悲しむのは常住不変であることを願うからである。
口 すべてのものが変化するということを知らない者は愚かである。
ハ 人間には老いや死がすぐさま訪れ、わずかな間も休止することはない。
ニ 人間がいかに身を養おうとも結局のところ老いや死は必ず訪れるものである。
ホ 迷界にある人間は老いや死が避けられない人生を楽しむことなどできない。
ヘ 名誉や利益に心を奪われて死が近いことを顧みないのは愚かなことである。

問二十一 甲の文章の傍線部 3 「春水（為永春水）」の作品を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 『雨月物語』
口 『金々先生栄花夢』
ハ 『春色梅児誉美』
ニ 『曾根崎心中』
ホ 『玉勝間』
ヘ 『南総里見八犬伝』

問二十二 甲の文章の空欄

Ⅱ

に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 訓読
- ロ 戯作
- ハ 書簡
- ニ 俳諧
- ホ 駢文
- ヘ 連句

問二十三 乙の文章の空欄

Ⅲ

に入る最も適切な漢字を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 使
- ロ 何
- ハ 将
- ニ 豈
- ホ 対
- ヘ 有

問二十四 乙と丙の文章は、同一の逸話を伝えてはいるが、その内容は完全には一致しない。両者を比較した次の文中で、正しい趣旨を説明しているものを二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 乙では生後まもない男児を犠牲にする話となっているが、丙では三歳になった男児に老母が食を与えるのを夫妻が疎んだため男児が埋められている。
- ロ 乙では黄金の釜の銘文には男児を埋めてはならないとも記されていたが、丙ではそのような文言は記されていない。
- ハ 乙では黄金の釜を得た夫妻が富貴になったとあるが、丙では人びとが争って黄金の釜を奪おうとしている。
- ニ 乙では郭巨が母への孝をつくすことに加えて亡き父をしのぶ様子も述べられるが、丙ではそのような言及は一切みられない。
- ホ 乙では郭巨の行動を当時の人びとがほめたたとあるが、丙では郭巨に対する人びとの評価については触れられていない。
- ヘ 乙では夫妻が男児を犠牲にしようとしたのは凶年のことであったとあるが、丙では不作の年であったとは設定されていない。

問二十五 丙の文章の①から⑥の二重傍線部「り」のうち、傍線部4「り」と文法上のはたらきが異なるものの数を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 一つ
- ロ 二つ
- ハ 三つ
- ニ 四つ
- ホ 五つ
- ヘ 六つ

問二十六 甲・乙・丙のいずれかの文章の趣旨と合致するものを、次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 『孝子伝』の郭巨の話を徹底的に和文化的にしたのが『今昔物語集』であり、その後の文体の標準となった。
- ロ 郭巨の母は孫に自分の食事を与えるほど愛していたため、郭巨は子を埋めるのを躊躇した。
- ハ 訓読によって考え出された語彙や語法は本来の日本語とは異なるものであったが、だんだんと日本語の中にとけこんでいった。
- ニ 現在使用されている言文一致の文章は明治以来の作家が漢文訓読調との葛藤を経て和文脈に回帰したものである。
- ホ 日本で古くからさまざまな試みがなされてきた訓読は漢語と和語を調和させながら漢籍を理解しようとするものであった。
- ヘ 和文脈の基盤を支える役目を果たしていた漢文訓読調は、やがて和文脈をしのぎ最も権威を有する文体となった。

〔以下 余白〕